

〔茶道筌蹄^三〕灰 見付ヶ 見込 切落し 山

真 透木風呂 二文字なり

紹鷗はひとふり 丸釜 四方 阿彌陀堂 面 道安^〇風と同じ、大風呂は山を二ツ取る、

〔長闇堂記〕一大昔八寸六寸の圍爐裏の時は、火箸にて灰を上段のうはろ迄かきあげ、炭置て後火ばしかたぐを以て、ぐるりぐと灰廻したるよしなり、此數寄には逢たる事なし、其後けさう灰を小さかかはらけてかけたる時は、我もせるなり、後にはあはび貝をしやくしのごとくすりて、それを用ひしなり、扱金杓子、柄火箸は利休始らるゝなり、

〔茶之湯六宗匠傳記^五〕小堀遠江守宗甫公自筆の寫

一あられ灰を用ゆる事、爐中がきれいに成故也、ふくさ灰にてすれば、炭心の儘に入にくし、あられに付ても三段のならい有、大あられ中あられ小あられ、釜に依て遣様口傳、面談ならでは難成、〔喫茶指掌編^三〕庸軒常に云、遠州の風爐の灰は至て手際よく、實に刺刀にて切たる如く立派にて、前に灰を立炭を置時、土器の灰を不掃灰の仕様は一通りに極たる也、亦宗旦の灰は古風にて、行か、りさつと致たる灰なり、前土器の上に灰を掛るもかけぬも有て、立派なる事もなく、初より土器の中程は見えて有也、灰は何となく勢有て位よく、さつと灰を致て風呂へ火を入るなり、故に通とは格別に極たる事なく、只位と勢を專と致也、夫故に素人は宗旦の灰は仕易様に思共、遠州織部のは、手際計にて立派なれども、仕習やすし、宗旦流は手ぎはいらぬ替りに、勢と位とは中々初心の人の眼には入らぬものなりと云り、

〔茶道要録^{主上}〕爐同縁之事

一灰之事、爐ニハ霰灰ニ、フクサ灰トテ微塵ヲ交テ用ユ、春ハ陽氣埒リヲ立ル故ニ、微塵ヲフルヒヌキ、霰灰計ヲ用、佗人ハイットテモフクサ灰計ヲ用也、未流ニ霰灰ノ粒ヲ大小汰^ツユル事アリ、尤